

令和7（2025）年度
熊本大学法学部
学校推薦型選抜Ⅰ（イ）問題
小論文

試験時間 120分

ページ・・・1～4

注意事項

- 1 試験開始の合図があるまで、この小冊子は開かないこと。
- 2 試験開始後、問題用紙、解答用紙、下書用紙が揃っているかを確認すること。
- 3 解答用紙すべてに受験番号を記入し、氏名は記入しないこと。
- 4 解答は必ず解答用紙の指定された箇所に記入すること。なお、解答用紙の追加は認めない。
- 5 配布された解答用紙は持ち出さないこと。
- 6 試験終了後、問題用紙および下書用紙は持ち帰ること。

【問題】

次頁からの文章を読み、以下の〔問一〕、〔問二〕に答えなさい。

〔問一〕

本文の内容を四〇〇字以内で要約しなさい。

〔問二〕

著者は「人間は、討論と経験によって、自分の誤りを正すことができる」と述べていますが、この著者の視点を踏まえると、あなたの周りや社会にはどのような問題があると思いますか。具体例を挙げて、八〇〇字以内で述べなさい。

【出典】

J・S・ミル(関口正司訳)『自由論』(岩波書店 二〇二〇年)四二～五一頁。なお、注は省略した。

仮に、意見というものがその保持者以外には価値のない個人的所有物であつて、保持することに邪魔が入つたとしても損害はその個人にとどまる、というのであれば、損害を被る人数が多いか少ないかで、なにがしかの違いは出てくるだろう。ところが、意見表明を沈黙させることには独特の弊害がある。沈黙させることで人類全体が失つてしまうものがある、ということである。現世代の人々ばかりでなく、後世の人々にとつても、失うものがある。その意見に賛成する人々にも、それにもまして、その意見に反対する人々にも、失うものがある。「第二」にもしその意見が正しいのであれば、人々は誤謬を真理に取り替える機会を失う。「第二」にもし誤りであつても、ほとんど同じぐらい大きな利益を失う。真理と誤謬との衝突があれば、それによつて、真理はさらに明確に認識され、いっそう鮮烈な印象が得られる。この大きな利益を失つてしまふのである。

これら二つの仮定については、それぞれの仮定に対応する異なつた議論系列があるので、別々に考察する必要がある。「第一」の仮定について言うと「抑え込もう」としている意見が間違つた意見だと確信することは、不可能なことである。また、「第二」の仮定について言うと間違つていると確信していても、その意見を抑え込むのが害悪であることに変わりはない。

第一に、権力によつて抑圧されようとしている意見が、もしかすると真理であるかもしれない場合である。その真理を抑圧したがつている人々は、もちろん、それが真理であることを否定する。しかし、こうした人々が無謬であるわけではない。彼らには、全人類に代わつて問題に決着をつけて、自分たち以外のすべての人々に判断の手段を与えないでおく権限はない。ある意見が誤りだと自分たちは確信しているからという理由で、その意見に耳を傾けようとしなないのは、自分たちの確信を絶対的、確信と同じものだと想定することである。討論を沈黙させることは、すべての場合において、無謬性を想定することなのである。この常識的な議論を根拠に、討論を沈黙させることを非難してもよいだろう。常識的な議論だからといって、その分、妥当性が失われるわけではない。

人類の良識という点で残念なことだが、人類の可謬性という事実は、理論の上ではいつでも重要性が認められながらも、実際の判断ではまったく重視されていない。なぜなら、自分が誤りうることは誰もがよく知つていても、ほとんどの人々は、自分自身の可謬性に対して予防策をとる必要があるとは考えていないし、自分が十分に確実だと感じている意見が、自ら陥りやすいと認めている誤謬の一例かもしれないという想定を受け容れないからである。絶対君主や、それ以外でも無条件的に服従されることに慣れきつていいる人々は、ほとんどすべての問題に関する自分自身の意見について、そのような自信満々の確信を感じるのがふつうである。これよりも恵まれた境遇にある人々、つまり、自分の意見に対する反論を耳にすることが時々はある。自分に誤りがあったときにそれを訂正される、ということにまったく不慣れというわけでもない人々でも、同じような見境のない自信を自分の意見に持つことがある。自分の周囲にいる人が皆、自分と同意見だつたり、いつでも尊敬している人が自分と同意見だつたりする場合はそうである。なぜなら、こういう人はたいいてい、自分一人だけの判断に自信が持てない分だけ、「世間」全体の無謬性に絶対的信頼を置くからである。しかも、世間と言つても、各人にとつてそれが意味しているのは、世間のうちで自分が接している部分のことである。つまり、自分の党派、自分の宗派、自分の教会、自分の社会階級である。これに比べれば、世間の意味するところが、自分の祖国とか自分の時代といった広大なものである人は、まだ度量が大きく心の広い人物だと言つてよいぐらいである。自分の属する集団の権威を信頼していると、他の時代、国、宗派、教会、階級、党派は正反対の考え方だつたし今でもそうだと気づいても、その信頼はまったく揺るがない。こういう人は、異論を唱える他の人々にとつての世間と張り合つて正論を守る責任を、自分自身にとつての世間に転嫁しているのである。これら教

多くの世間のうちのどれが当人の信頼の対象になるかを決めていたのはたんなる偶然であり、ロンドンで当人をイギリス国教会の信徒にしているのと同じ原因は、北京であれば仏教徒か儒教の信奉者にしただろう。こういうことも、当人はまったく気にかけていない。とはいえ、個人が無謬でないのと同じように時代も無謬ではないのはわかりきったことであり、ちよつとした議論で片付く話である。どの時代にも、後の時代からすれば誤っているばかりでなく、ばかばかしくも思える数多くの意見があるものである。だとすれば、以前は一般に広まっていた多くの意見を今の時代が否定しているのと同じように、現時点で一般に広まっている多くの意見も、将来の時代が否定するようになるにちがいない。

以上の議論に対して出てきそうな反対論は、おそらく、次のようなものである。誤った意見の拡散が禁止されても、そのとき無謬性が想定されているわけではない。これに関しては、公的な権力が自らの判断と責任にもとづいて行なっている他のすべてと変わるところはない。判断力が人間に与えられているのは、それを使うためにである。判断力が誤って使われることもあるからといって、判断力を一切使わない、と命じらるべきだろうか。有害だと考えられるものを禁止したとしても、それで自分は無謬だと主張しているわけではない。誤ることはあるにしても、自分の良心的確信にもとづいて、自分の職責を全うする義務を果たしているのである。自分の意見は間違っているかもしれないから自分の意見にもとづいて行動すべきでない、というのであれば、われわれは自分の利害のすべてをないがしろにすべきで自分の義務のすべてを果たすべきでない、ということになる。すべての行為に当てはまってしまふような反対論は、特定の行為に絞って反対する際の有効な議論にはならない。可能な限りで最も真理に近い意見を持つこと、慎重を期して意見を持つこと、また、正しいという十分な確信がなければ他人に自分の意見を押しつけないことは、政府および個人の義務である。しかし、正しいという確信があるときは(と、この論者は言うだろう)、自分の意見にもとづいて行動するのを避けるのは、良心的なことではなく臆病なことである。また、あまり開明されていなかった時代に、現在は真理だと考えられている意見を迫害した人々がいたにせよ、だからといって、現世と来世のいずれにおいても人類の幸福にとつて危険だと本心から思っている主義主張を制止せず拡散させてしまうのも、良心的なことではなく臆病なことである。以前と同じ間違いをしないよう気をつけよう、という議論もあるだろうが、しかし、政府も国民も、権力を行使してもよいことになっている他の問題でも間違いを犯してきているのである。不当な課税もあったし、不正な戦争もあった。だからといって、一切の課税はすべきでなく、どんな挑発があつても戦争はすべきでない、ということになるだろうか。人々にしても政府にしても、自分の能力の最善を尽くして行動しなければならぬ。絶対的な確実性などというものは存在しないが、しかし、人間生活の目的にとって十分な程度の確実性は存在する。われわれは、自分自身の行為を導くために自分の意見を真理だと想定してよいし、また、そのように想定せざるをえない。虚偽で有害だと考えられる意見があつて、それを邪悪な連中が広めて社会を誤らせることを禁止する場合でも、それ以上の想定はしていない、というわけである。

いや、はるかにそれを超えることを想定している、というのが私の応答である。反論のあらゆる機会があつたのに反駁されていない意見だから、その意見を真理と想定するということ、反駁を許さないという目的のために意見が真理だと想定することとの間には、この上なく大きな違いがある。われわれの意見に向かつて論駁し反証する完全な自由(を認めること)こそ、行動を起こす目的のためにその意見を真理だとわれわれが想定するのを正当化する条件なのである。これ以外の条件では、人間の諸能力をどう働かせても、真理かどうかについて合理的な確信を持つことはできない。

世の中の意見や人間生活のありふれた行為が以前はどうだったかを考えてみると、どちらも現状と変わらず、ますますの状態におさまっている。なぜだろうか。人間の知性に元々そなわっている力によるのではないことはたしかである。なぜなら、どん

な問題にしる自明ではない問題を判断するとなると、一〇〇人の中で一人はできても、九九人はまったくできないからである。しかも、その一人の能力にしたところで、相對的に上ということではない。というのは、過去のどの世代の場合でも、群を抜いてすぐれていた人たちがでありながら、その多くは、今では誤りだとわかっている意見を信じ、今なら誰も正当とは考えない多くの物事を行なったり是認したりしていたからである。それではなぜ、人々のあいだで合理的な意見や合理的な行為が、全体として見れば優勢なのだろうか。そうした優勢は、人間生活の状態が現時点でも過去のどの時点でも、ほぼ絶望的になつているのでない限り、存在しているはずである。それが現実存在しているとするれば、人間精神の一つの資質のおかげなのである。その資質とは、知的な存在であり道徳的な存在でもある人間において、尊敬に値するすべてのものの源泉となつていゝ資質、つまり、誤りを正すことができるという資質である。

人間は、討論と経験によつて、自分の誤りを正すことができる。経験によつてだけではない。経験をどう解釈したらよいかを示すための討論もなければならぬ。誤つた意見や実践は、事実や議論に少しずつ屈していくものである。しかし、事実や議論は、知性にながしかの効果をもたらすためには、知性に訴えてくるようにする必要があるのである。事実といつても、その意味を明らかにしてくれる注釈なしで理解できるような事実は、ほとんどない。そうだとすると、人間の判断の強みと価値は、判断が間違つていゝときは訂正できるという特質に依存しているのだから、判断を信頼できるのは、訂正する手段がいつでも手元に保たれている場合に限られる、ということになる。

本當に信頼に値する判断をする人の場合、どうしてそうなつていゝのだろうか。その人の知性が、自分の意見や行為に対する批判に開かれていゝからである。自説への反論となりうるすべての議論を傾聴すること、批判が当たつていゝ部分からは多くの教訓を得るとともに、誤つていゝ部分については、どこが誤つていゝかを、自分に向かつて、またときには他の人々に向けても丹念に説明することが、その人の習慣になつていゝからである。人間が問題全体の認識に少しでも近づいていける唯一の方法を、その人が実感してゐるからである。その方法とは、多様な意見を持つ人々がその問題について語ることであり、すべてに耳を傾け、また、あらゆるタイプの知性がその問題を注視する仕方をことごとく学ぶことである。どんな賢者も、これ以外の方法で英知を獲得したことはない。また、人間知性の性質からして、賢明になるのにこれ以外の方法はない。自分自身の意見と他人の意見を照らし合わせて自分の意見を訂正し補完する堅実な習慣は、自分の意見を実行に移すときに懐疑や躊躇を引き起す原因などではない。それどころか、自分の意見に正當な自信を持つための揺るぎない唯一の根拠となる。その理由はこうである。このような人は、少なくともはつきりした形で自分に向けられる反論は全部知つていて、反論してゐる全員に對抗して立論を行なつていゝ。自分は反論や難点を回避するのではなく探し求めてきたのであり、問題に対して投げかけることのできるどの角度からの光も遮つてはいない、とわかつていゝ。だから、どんな個人や大衆にせよこれと同じ手順をたどつていない判断をしてゐるのであれば、それよりも自分の判断の方がすぐれていゝと考へる権利がある、ということなのである。